

調査団体名	NPO法人 山菜の里いび	団体代表者名	小寺春樹
設立年	2007年3月6日	団体URL	http://www.npo-ibi.jp
活動地域	揖斐郡揖斐川町春日	調査員	井上、松井、森川、杉野、河合、山崎、小野
取材日	2010/8/2	レポート作成者	山崎真由美(井上祥一郎)
<b>森と共に生きるモリモリ村、地域にあるものを活かし交流を通しての地域の活性化</b>			
<p>&lt;活動内容&gt;</p> <p>地域と近隣市町の住民が交流し、協働して地域の知恵を活かした地域の活性化に努め、里山景観の維持を目指す。</p> <p>里山暮らしの学校の開催(耕作放棄地の再生活動を手段として実施)が活動の中心。</p> <p>○耕作放棄地の農地化や、再生農地を借り上げて共同圃場化。</p> <p>○地域野菜(例えばサワアザミ)や茶(茶の木に登る独特の春日豆の商品化も含めて)、山菜(ヨモギ、ワラビ、タラの芽)栽培。</p> <p>○里山暮らしの学校(年に13回ほど開催。体験的稲作、ジャガイモづくり、トチの実採り・トチ餅づくり、こんにゃくづくり、祭りの踊り鑑賞など)活動。特に、岐阜の棚田21選に選ばれた168枚からなる貝原棚田のうち数枚を借り受けて小学生が体験。</p> <p>○里山通販(収穫した地域農産物の通信販売)の実施。商品としては量的に不足する産品をイベントなどで自前材として活用。</p>			
<p>&lt;会のモットー(何を大切にしているか)&gt;</p> <p>先祖が残してくれた土地と、自然と共に生きる知恵を守ろう！ 森と共に生きる村、森の恵みを活かした村づくり。</p>			
<p>&lt;設立から現在に至るまでに変化したこと&gt;</p> <p>会の名に「山菜」を入れると盗採が増えると危惧する会員もいたが理解が進んだ。当初は「年金プラス5万円」の収入にして定住者を増やすことを考えたが、地元出身者が時々地元に戻って、森と共に生きる暮らしに親しむ機会を提供することにシフト。</p>			
<p>&lt;連携している団体・専門家・自治体など&gt;</p> <p>○揖斐川町春日振興事務所、地区の小学校、かすがモリモリ村フレッシュ館 ○大学関係(岐阜薬科大学、岐阜大学、三重大学) ○県関係(県工業技術センター、国際バイオ研究所) ○NPO関係(里山暮らし応援隊、ぎふ森林づくりサポートセンター)</p>			
<p>&lt;今までに行った調査・研究&gt;</p> <p>○在来種の茶の木に登る春日豆を三重大学や中津川の川上屋と共同研究(薬効・粉末化等)。 ○在来種のヨモギの中でも茎の黒い品種に薬効としてボケ防止の医薬資源の可能性があるとし、岐阜薬科大学と調査・研究中。 ○ブルーベリーを試験栽培中で、土壌に合うことが分かれば、取り木して希望者に分け、産地形成を考えている。</p>			
<p>&lt;現在直面している課題&gt;</p> <p>○薪炭林の荒廃:かつては15年程度で輪伐していたが、最近は伐採しないのでナラ枯れが出ている。 ○農地の借り上げ:10年後には7、8集落が消える恐れがありながら、地元の賛同者からの借り上げしかできていない。 ○スタート時30名の会員は徐々に増え42名になっているが、実働部隊代表者と事務局と限定的な状況は変わっていない。 ○農家の元気を削ぐ獣害を「山くんだり」と呼ぶが、激しくなっている。 ○中学になると生徒数の多い町場に引っ越すケースが多い。</p>			
<p>&lt;今後やってみたいこと&gt;</p> <p>○岐阜市から地元出身でない2家族がイベントの常連で、定住につながるよう期待している。 ○炭が焼ければナラ材の持続を図ることができるので、炭焼きの復興も考えてみたい。 ○ヨモギのボケ防止機能や、春日豆の新たな薬効に期待しているように、薬草の伝統を活かした新しい地域づくり。</p>			
<p>&lt;そのためにはどんな情報・人脈が必要か&gt;</p> <p>○行政やNPOの定住促進情報 ○三重大学や岐阜薬科大学などの専門家の協力</p>			

＜チームオリジナルの質問＞	
質問内容:	このような活動を始めたいと思った動機は何か？
答え:	父親が炭焼きをやっていた50年前でも、すでに環境異変を感じていた。天然林から人工林になって豊富にいた昆虫や200種以上あった葉草も減少し、川のアマゴも水量不足と釣りブームでやがていなくなってしまうかと心配した。山では生活できず、若者はまちへ出た。生まれた村や里山は荒廃し、村の担い手は激減し、今や10年後には多くの村が消滅するという。何とか原野化した放棄地を農地に変え、消えゆく文化を残したい、という思いから村に戻ろうと思った。
＜その他、調査団体からのメッセージ＞	
<p>○代表者の小寺さんにとっては生まれ育った「森に生きる暮らし」が原風景であり、それが活動の原動力になっている。「生きる」ことに密着した「森＝自然＝土地＝景観」のつながりは、独自の暮らしや文化を生み出し、都市住民には持ち得ない独特の心情＝愛着である。小寺さんが村の子どもたちに伝えたいことは、単なる米づくりや餅づくりでなく、この地に暮らす愛着であり、誇りなのであろう。小寺さんの地元出身者へのこだわりと、役割認識は活動の重要点である。その愛着＝心情を理解した上の外部者の後方支援が望まれる。また、小寺さんの「地元出身者」理解は閉鎖されたものではなく開かれたものであり、その地に生き、その地をこよなく愛する者は誰でも地元民になれるのである。そこに活路を見いだしている。</p> <p>○村民には、限界集落化し、集落の存続が崖っぷちのところまで来ていることに対してあきらめムードが感じられる。確かにそれは抗いがたい構造的な問題に起因するものであるものの、そのことが村人の受身的でこれまでの価値観や考え方を変えようとしめない態度につながり、小寺さんが何とかそれを乗り越えようとするとき、大きな障壁となっている。現在の農村の疲弊が昭和35年(1960)頃から始まった拡大造林や農村の若者の都市での労働力化、最近の合併といった政策に由来するとはいえ、お上任せではなく、自分たちで自分たちの暮らしや将来のあり方を主体的に決めていくことが地域の活性化には必須であり、そのためには、それにふさわしい新たな価値観と規範が必要である。その意味で小寺さんは、村に戻った「農山村市民」であり、変革の旗手である。地域の活性化を、離散することを前提にした地元出身者への緩やかな組織化と、共同圃場など新たな発想とルールで進めているが、こうした投げかけに地元出身者がどのように応えていくのかが鍵となる。</p>	
	
年5回収穫するヨモギ畑で説明する小寺さん	
＜執筆者の感想(心に残ったこと)＞	
<p>地元の食材を使った昼食をおいしくいただいた後、貝原の棚田や10年近く放置されていた農地を再生した山菜(ヨモギ、ワラビ、タラの芽)農地、工芸村に隣接するブルーベリー畑等を案内いただき、それらを取り巻く豊かな森林環境を目視することができた。また、それらを水源地とする清れつな沢水に心が洗われる思いがした。代表者の父上も、同席いただいた事務所の課長の父上も炭焼きで生計を立てておられたという。</p> <p>短時間の現地認識で独断的な判断はせんえつだと思うが、現地の立地条件を農学部林学科で造林を専攻した筆者(井上)から見ると、林業を主とし、農業を従にした地域づくりが下流域の生活の安定化に欠かせないと思った。</p> <p>地理学の知見から、安定した森林が失われたことでそれまで営々と蓄積されてきた森林や農地の土壌が流出し、下流に大災害が発生した遺跡的地形が、平安時代にできたと推定されている木曾川下流域の「自然堤防」という。都市住民がこの災害の再来を恐れるのであれば、森林荒廃を未然に防ぐ努力を都市住民自身が上流に対してお願いする立場にあるのではないか？</p> <p>間伐材の住宅資材としての利用がその解決策の一つとすれば、次のような提案をすることができる。</p> <p>住宅資材としての条件の一つが木材の乾燥(15%以下)である。高温乾燥が目指されている最近の技術動向では考えられない48℃という超低温の乾燥室が開発されており「愛工房」という。杉材の難乾燥性の解決目的で開発されたが、奇しくも、葉草の薬効が失われない乾燥温度が48℃という。杉材の良さが乾燥法で生かされると、地元材の消費動向が上向き可能性がある。地元材の良さと、葉草の品質安定を、「愛工房」という乾燥室を介して実現させたらどうかと思うのである。</p> <p>小径間伐材を多用する拙宅を伊那谷に活動拠点としてつくった。一昨年のものである。10cm角材でパネルをつくらせて組み立てる壁式工法であるが、無垢材のパネルが構造材、内装材、断熱材、蓄熱材を兼ね、地震にも強く、温湿度等居住空間としても優秀である。短くとも百年住宅は期待できる。このような住宅が多くつくられると、森林が健全になり、都市の安全も守られる。</p>	